

10

反映／投影論から生産的フォーラムとしてのジャンルへ ——ヤオイ考察からの提言

溝口彰子

「趣味」じゃないんだ！ 私にとって、漫画を読むというのは、すでに「生きる」というのと同義語だ！（三浦 2006： 13）**

相手の頭脳の回路から、欲望の回路まで見えてしまうこと。観察から得たちょっとした情報で妄想を膨らましてゆく、あんたのアンテナ、ちょっと感度良すぎ！ みたいなことを互いに観察しあう、それが快樂なんです。そういう仲間との間にあるものはそれはもう「愛」という言葉でしか表現できない気がしますが（三浦 2007： 3）。

女性による女性のための男性同士の恋愛を軸としたマンガおよびイラストつき小説群を広義のヤオイと呼ぶとして、その始祖を1970年代の少女マンガの中の「美少年マンガ（少年愛）」とすると40年近く、1961年の森茉莉の小説「恋人たちの森」まで遡れば50年の歴史を持つ。広義のヤオイ史については別稿を参照いただくとして（溝口 2003： 27-53、Mizoguchi 2003： 49-75）、2010年前半現在の状況を確認すると、ボーイズラブ、もしくはBL（ビーエル。以下BL）と呼ばれる商業出版と狭義のやおい同人誌が広義のヤオイ・シーンを

* 英語文献からの引用文は筆者が翻訳した。

** 本論中では「マンガ」とカタカナ表記だが、ここでは引用もとの漢字表記とした。

形成している¹。BL 商業出版が中心の時代は1991年から続いているが²、1980年代を唯一のヤオイ商業誌として牽引した『JUNE』誌が休刊した2004年を区切りとして、現在は第二期とすると整理しやすい。もちろん、『JUNE』休刊の前後でヤオイ・シーンが劇的に変化したわけではなく、すべては有機的に第一期から継続して展開してきたことではあるが、BL 中心時代の第二期の特徴として、次のことがらをあげる。ヤオイのグローバル化の進展（2004年からはアメリカ合衆国でもBLの翻訳出版が本格化）、メディアミックス展開（第一期から引き続いてのドラマCD化や家庭用OVA化に加え、BLマンガを原作としてテレビ放映されるアニメも登場³。また、ヤオイ的内容の、あるいはBLを原作とする実写映画も作られるようになった⁴、他ジャンルへ進出するヤオイ出身作家や、BLと非BLジャンルを両立させる作家の増加⁵、過去作品の文庫版や愛蔵版での復刻出版の開始。また、マスコミによる「腐女子」報道によって結果的にヤオイ愛好家という存在の一般社会での認知度が上昇した⁶。ヤオイ作品群が、基本的に美男子二人が「攻」と「受」の役割に分かれ、セックスにおける挿入する側とされる側を演じる男同士の恋愛を縦軸に、スポーツや仕事などを横軸にしたロマンス物語とバディ物語を兼ねた作品が主であることはBL 中心時代初期から変わらないが⁷、第二期においては絵柄、舞台設定、物語展開など作風の幅が広がっており、ホモフォビック（同性愛嫌悪的）な設定や出会い頭のレイプが減っている⁸。

1 広義のヤオイをカタカナで、やおい同人誌を狭義のやおいとしてひらがなで表記し、区別している。その理由についての詳細は前掲の「溝口 2003: 27-53」を見よ。

2 1991年とした理由については前掲の「溝口 2003: 49」の註31を見よ。

3 中村春菊のマンガ「純情ロマンチカ」を原作とするアニメ『純情ロマンチカ』（今千秋監督、2008年、AT-X系列）を例にあげる。

4 前者の例としては『BOYS LOVE』（寺内康太郎監督、2007年）、後者の例としては『愛の言葉』（原作マンガ：紺野けい子、金田敬監督、2007年）、ごとうしのぶの小説「タクミくんシリーズ」を原作とする『タクミくんシリーズ』そして春風にささやいて『タクミくんシリーズ 虹色の硝子』『タクミくんシリーズ 美貌のディテイル』（横山一洋監督、2007、2009、2010年）をあげる。なお、ネット上の感想コメントや、私のヤオイ愛好家友達の言葉からは、これら「BL映画」を標榜する実写映画の観客層は、BL愛好家とはあまり重ならない可能性が感じられる。

5 前者の例としては西桐や、よしながふみ、後者の例としては中村明日美子、阿仁谷ユイジ、BLと非BLでペンネームを使い分ける basso / オノ・ナツメをあげる。

6 「腐女子」という言葉は、マスコミがねっ造したネガティブなヤオイ愛好家像のステレオタイプに対するレッテルとして、ヤオイ愛好家たちは抵抗を示していたが、現在では多くの愛好家が自称として使うようになっている。「腐女子」という言葉についての当事者の見解や「腐女子」をめぐる議論については「名藤 2007: 55-117」を見よ。

7 BL テキストの定型については、「溝口 2000: 193-211」を見よ。

8 ホモフォビアやレイプの減少についての分析については「溝口 2007: 56-62」を見よ。なお、BL 作品の作風の幅の広がりについて分析は稿を改める。人気作品の例については、ガイド本が参考になる（たとえば、NEXT 編

私は、ヤオイは誰かの現実を反映するものではなく、また単なる個人的ファンタジーの投影でもなく、さまざまな性的指向の女性たちの欲望やファンタジーと政治的、社会的現実が衝突する闘技場から生まれる表象であるという前提で、1998年後半から愛好家実践と並行して考察を行ってきた。この前提はテレサ・ド・ローレティスに学んでいる。ド・ローレティスは、男女ものポルノグラフィをめぐる論争の際に、「……フェミニストの分析と政治は女性が社会的にこうむった傷と同時進行で進んできた一実のところ、その傷によって促されてきた。しかし、フェミニズムの強さ、もしくは、フェミニズムが持ちうる可能性のある社会的な力は、その傷をなかったことにするわけではない」と指摘（De Lauretis 1994: 146）、ポルノグラフィ擁護派による個人的ファンタジーと表象の同一視も、反対派による表象と現実行為の同一視も適切ではなく、女性観客を意識的かつ政治的、社会的主体性（subjecthood）と、個人的、精神分析的主体性（subjectivity）の両方の複雑な合成物だとした上で分析するダブル・ムーヴメントは、フェミニストとして表象を扱う上での必然であることを示した（De Lauretis 1994: 147）。同論争でジュディス・バトラーが主張したように、女性主体がファンタジーの中では女性以外の、男性や、シナリオ全体に同一化することができることは精神分析理論的に正しい。しかし、ポルノグラフィという公的な表象に対峙する女性観客は、同時に必ず社会的主体でもある。そのため、女性が傷つけられる場面で自分が社会の中で占める立場である女性キャラクター以外に同一化できるためには、その表象と距離を持つことが必要だが、そうはできない女性ード・ローレティスが「ドウオーキン」と呼ぶ一は多い。女性が主人公ではないヤオイは、ド・ローレティスらが考察する異性愛男性向けの男女の性愛を中心にしたポルノグラフィよりも、このダブル・ムーヴメントそのものをジャンルの根幹として体現するジャンルだ。というのも、女性たちが男性同士の恋愛物語を、自分たちのファンタジーを投影した表象として生産し、受容しうることは、彼女たちの主体性が社会的主体としてのポジションから自由でありうることを示している一方で、そもそも女性

集部 2008、2009）。

読者が男性同士の恋愛物語を必要とするということ自体が、彼女たちの「傷」を示すのだから。

この仕組みを現実逃避として批判するのか、快楽の装置として評価するのか、様々な議論がなされてきた。議論の幅と変遷については、金田淳子によるまとめなどを参照いただくとして（金田 2007a: 163-190、金田 2007b: 48-54）、本論では、女性たちのフォーラム、あるいはコミュニティとしてのヤオイに焦点を当てる。まず、ヤオイ愛好家たちのコミュニティ意識について考察する。次に広義のヤオイ・ジャンルがいかにか「ヴァーチャル・レズビアン」空間として機能しているかを示していく。BL 商業出版は産業として成立しており、その意味ではBLは公的な表象だが、極めて私的な女性たちの絆を培ってもある。少し先回りして言えば、BL 商業出版中心の時代になって20年、BL作家を生業に社会人として経済的に自立している女性を数百人擁しながらも⁹、女性だけの親密な「ヴァーチャル・レズビアン」空間であることから、生産的なアクティヴィスト空間の可能性が生まれた、というのが私の分析だ¹⁰。紙幅の都合で、フェミニスト、レズビアン、さらにクリアな意味でのアクティヴィスト的な事例については、本論の最後で簡単に示すことしかできないが、これについては稿を改めたい。

日本でおそらく最も著名なヤオイ愛好家である直木賞作家、三浦しをんが述べているように¹¹、ヤオイを「読む」ことはヤオイ（のコミュニティの成員としての人生）を「生きる」ことである。また、三浦が「愛」と呼ぶものは、彼女と彼女の妄想仲間の間だけではなく、広くヤオイ愛好家女性たちの間に存在

9 近年のBLマンガのガイドブック（NEXT編集部編：2009）では2008年10月から2009年9月発売の主なBLマンガの作者として314人をあげており、BL小説のガイドブック（雑草社編集部編：2003）では151人の小説家をあげている。いずれも、プロのBL作家を網羅しているリストかどうかはわからないし、とりあげられている作家が専業作家ばかりとは限らないが、おおまかな人数の目安にはなるだろう。

10 1993年という早い時点で、やおい愛好家女性たちを観察し、分離主義レズビアン（レズビアン・セパラティスト）に似ており、精神的レズビアンかもしれないと指摘したのは栗原知代である（栗原 1993: 338）。本稿は栗原に示唆を受けつつ、資本主義社会に生きるフェミニストとしての経済的自立と社会進出の問題意識から、BL商業出版を中心に、やおい同人誌活動も行うという作・読者層を中心に想定し、広義のヤオイ・コミュニティ全体を考察対象としている。リサーチを兼ねた筆者の愛好家実践も同様である。なお、近年のやおい同人誌活動に従事する愛好家に対象を絞った研究（例えば、金田 2007a: 163-190、金田 2007b: 48-54、名藤多香子 2007: 55-117、東園子 2010: 249-274）は栗原の分析は参照していないようである。なお、東は愛好家のなかにレズビアンも存在すること、コミュニティの雰囲気からレズビアンへの嫌悪感や警戒心が感じられないことには言及している（東 2010: 266）。

11 三浦しをんは、「まほろ駅前多田便利軒」で2006年直木賞受賞。

している。本論は、その「愛」の可能性を考察する準備として、「愛」のあり方を説明する。それによってヤオイ研究の領域だけでなく、コミックスやマンガのジャンル研究に新たな視点を示すことをも目指している。

本論では、冒頭に述べたように女性による女性のための男性同士の恋愛を軸としたマンガおよびイラストつき小説群を広義のヤオイと規定している。マンガ研究と銘打たれた場で「イラストつき小説群」をも含めていることには、ヤオイ・ジャンルならではの理由がある。かつて、マンガ雑誌の『JUNE』よりも『小説 JUNE』の発行部数が多い理由を聞かれ、当時の『JUNE』編集長、佐川俊彦は、同誌に寄稿するほとんどの作家がマンガで育った女性であり、文字のみの物語を綴る時には「単にマンガを文字で創っているだけ」だと語った（Schodt 1996: 121）。今日のBL小説も、BLマンガ家が「攻」「受」キャラクター（と、作品によっては主な脇役たち）の姿をイラストとして視覚化してはじめて完成するジャンルだと言っている（マンガは描かないイラストレーターも少数、いるが、その絵柄はBLマンガ的である）。例えば、奥二重で地味な目をした痩せすぎで貧相な体格の30歳男性であると文字で描写される「受」キャラクターであっても、読者の頭の中で動くのはこの絵の左側の姿だ（図1）。右隣の「攻」キャラクターよりはやや地味でやせてはいても、一般的に言えば十分に「美形」だ。この小説の作者、崎谷はるひはあとがきで、「じつは『地味っ子でも志水先生なら素敵に描いてくださるに違いない』という思いつきで作ったキャラ」だと述べている（崎谷 2010: 344）。イラストを担当するマンガ家、志水ゆきの絵柄や技量が先にあって、初めて創造された「受」キャラクターというわけであり、一種のコラボレーションともいえる。さらに、BLではマンガ家が小説のイラストを描く場合、マンガの作品群と舞台設定などで関連がある小説を担当する機会が多いため、BLマンガとBL小説は、イラストを介して有機的に相互作用をしている。例え



図1 崎谷はるひ『心臓がふかく爆ぜている』幻冬舎（ルチル文庫）、2010年、表紙（作画：志水ゆき）



図2 松岡なつき『華やかな迷宮』1、新書館（ディアプラス文庫）、2004年、表紙（作画：よしながふみ）



図3 よしながふみ『ジュエルとジャック』1、ビブロス（スーパーボーイコミックス）、2000年、表紙（現在、白泉社文庫で入手可。表紙絵は異なる）

ば、松岡なつきの「華やかな迷宮」の表紙（図2）を目にした多くの読者がマンガ家、よしながふみの「ジュエルとジャック」（図3）をはじめとするフランス宮廷もの世界との関連性を期待するだろう。よしながファンが表紙を見て「華やかな迷宮」を手にするこ

と、反対に松岡ファンが「華やかな迷宮」でよしながを知る、といった読者層の行き来もある。したがって、ヤオイを女性たちのコミュニティでありフォーラムであるという視点から論じる本論において、BLマンガとBL小説を切り離して扱うことは不適切なのだ。

1 ヤオイ愛好家のコミュニティ意識

ヤオイ愛好家のコミュニティ意識を示す例として、数年前、当時の職場の同僚X、ヤオイ愛好家として「発見」したエピソードを伝えたい。小説「リムレスの空」のあとがきに「……セクシャリティ問題に関しては草の根文化系レズビアン・アクティヴィストかつ親愛なる友人である溝口彰子氏に、……貴重なご助言をいただきました。」という私への謝辞が掲載されたのを読んで（榎田尤利 2002: 306）¹²、Xは、作者である榎田尤利^{えだゆうり}にメールを出し、自分の勤務先の情報を述べた上で、「もしかすると謝辞に載っていた『溝口彰子』さんは自分の同僚かもしれないが…」という意味のことを書いてきたという。それを受

けて、榎田が私に確認をとった上でXに返信し、しかる後にXと私は、同じ小説を愛読したヤオイ愛好家同士として、互いを「発見」した。Xの行動パターンは、多くのヤオイ愛好家が、ヤオイ・コミュニティの内部の人は心理的に近しく感じているけれども、コミュニティ外部の人かもしれない相手に対しては警戒心を抱く傾向があることの一例といえる。Xにとって、職場というコミュニティを共有する「溝口」は、榎田の謝辞の「溝口」と同一人物だという確約がなされるまではあくまでも、部外者である可能性のある人物であって、だからこそ、職場で直接、私に質問するよりも、一面識もないプロ作家である榎田にメールで問いあわせるほうがリスクのない、自然な行動なのだ。

このコミュニティ意識はコミックマーケット（コミケ）をはじめとする同人誌即売会への参加によって強化される。よく知られているように、コミケを筆頭に同人誌即売会の多くはプロ・アマ問わず、すべての参加者が平等だという原則の上に運営されている。人気のあるプロ作家であっても、自分の「スペース」と呼ばれるブースで自ら売り子を務めることが当たり前で、なおかつ、例えばブースにいる3人の女性のうち、どれが作家本人で、どれが「売り子」さん——アシスタントや手伝いの友だち——かが見ただけではっきりとわかることのほうが少ない。「〇×先生はいらっしゃいますか？」と聞けばわかるが、気後れして声をかけられない場合は、「私が好きな作家である〇×さんは、あの3人の女性のうち、どの人だろう？」と、思いつつ、同人誌を買い、立ち去る、ということになる。しかし、この「どの人かわからない」状態であることは、むしろ、「自分もプロ作家も、このヤオイ・コミュニティに等しく帰属するメンバーなのだ」という意識を強化することになる。そしてその仲間意識が、実際には会ったことのない作家へも拡大適用される¹³。

2 ミニ・コメント

同人誌即売会という「場」を共有することで培われるコミュニティ意識と、BL商業出版を橋渡しするものに単行本のミニ・コメントとあとがきがある¹⁴。

¹³ この議論は、「溝口 2007: 60」から発展させた。

¹⁴ 同人誌即売会に参加しないヤオイ愛好家であっても、愛好家友達との対面コミュニケーションによって培われる親密なコミュニティ意識を、面識のないプロ作家に拡大適用している。ほとんどのヤオイ愛好家が、インターネット上で他の愛好家と日々、コミュニケーションをとっているが、ネット上で知り合った相手でも、親しくな

¹² 現在入手可能な復刻版にはあとがきは収録されていない。

BL のマンガやイラストつき小説の単行本を手にとった読者がまず、目にするのは男性キャラクター 2 人を描いている表紙のイラストだ（一人の場合もあるが、数は少ない）。そして、表紙をめくると、ほとんどの BL レーベルの単行本では右側にくるカバーの折り返しに著者のミニ・コメントがあり、左ページには物語の代表的なシーンを描いたカラー・イラストがある¹⁵。つまり、表紙に掲載されているタイトルと、帯に記載されている惹句の次に読むことになる文字情報が著者のミニ・コメントであり、ストーリー本体の前にくることになっている。たいていの場合は、著者の誕生日、血液型、星座の下にコメントが記載されている。そして、このミニ・コメントで著者たちが述べるのは、プロ作者としての読者へのメッセージというよりも、ダイエット、食べ物、ショッピング、洗濯といったことがらであり、一女性として、女友達同士で交わすような日常的な雑談がほとんどだ。表紙の絵とも、すぐ後の頁から始まる物語の内容とも無関係なのだ。

例えば、水を物語の設定と視覚モチーフに使い、スレンダーな男子高校生同士の恋愛を描く高井戸あけみの



図 4 高井戸あけみ『恋愛の神様に言え』芳文社（花音コミックス）、2007 年、表紙&折り返し（表 2）

士の恋愛を描く高井戸あけみの「恋愛の神様に言え」では、表紙には作中で恋愛を成就させる 2 人の姿が青をベースにして描かれている（図 4：右）。表紙をめくった左頁には長髪で中性的な美貌の「受」キャラクターが水に濡れた姿のバストアップ。その右側の対抗頁、つまり、表紙とカラー・イラストの間に挟まれているのが作者高井戸

れば同人誌即売会場などで現実顔に顔を合わせるようになる。長期間にわたってネット上のみでコミュニケーションをとり続け、愛好仲間と対面しないヤオイ愛好家が存在する可能性は皆無ではないが、私自身はそのような人に出会ったことがない。

¹⁵ ミニ・コメントの場所にあらすじを掲載するレーベルに竹書房バンブー・コミックス麗人シリーズがある。ただし、このレーベルは、あとがきに加え、カバーをとった表紙面にしばしば著者手書き文字によるフリートークやおまけ 4 コママンガなどが印刷されており、本編を読み始める前にカバーを外してみる読者も多いため、読者と作者の女同士のコミュニティ感覚が弱いわけではない。

のミニ・コメントだ。ごく簡略化された自画像の横に手書き文字で「夏がくれば思い出すー」と書かれた下には、「AKEMI TAKAIDO」「高井戸あけみ」「PROFILE」に続いて「今年もやせないまま夏がくるー／毎年同じコメントだー／困ったー」という活字が表紙の折り返しに並ぶ（図 4：左）。物語の内容とは全く関係のない、女友達とするような雑談コメントだ。

物語の内容が深刻な場合は、作者のコメントとのギャップがほとんど不条理に感じられることもある。木原音瀬このはらなりせの小説「WELL」は、ある日突然、地上のすべてが白い砂と化した世界で、たまたま地下にいて生き残ったわずかな人間が生存をかけて葛藤する SF 的なサイコ・ドラマだが、表紙と本編の間に位置する木原のミニ・コメントは、次の通りだ。

「ジーンズは色落ちするとわかっていたので、ずっとデリケート衣類用洗剤を使っていたのですが、面倒になって普通の洗剤で洗ったら、見事に白くなりました。母親に話したら『染めてあげるわよ』と言われましたが、複雑です。」（木原 2007：表紙折り返し）

フィクションである物語を読む直前に、読者は、これから読むお話の作者が自分と同じような一女性だということを確認させられる。こうして、様々な設定のもとに美男子同士が愛し合い、戦いあう物語を受容しながら、同時に女友達たちのコミュニティであるヤオイ・コミュニティへの帰属意識が育っていく。

3 あとがき

単行本カバーの折り返しに掲載されているミニ・コメントの他に、ボーイズラブの単行本には、ほとんどの場合、作者によるあとがきが掲載されている。2 頁から 4 頁があてられることが多いあとがきは、ミニ・コメントよりも内容が豊富だ。「読んでくださってありがとうございます」「近い将来、お目にかかれますように」といったおきまりの読者へのメッセージと、編集者やアシスタントや友人や家族などへの謝辞の他、あとがきにはおおまかにいって、次の二つの要素が含まれる。一つ目は、本編のメイキングに関する情報。物語やキャラクターがどのようにして生まれたのかといった舞台裏を作者本人が解説するもの。そしてもう一つは、作者が、本編を創作するプロセスを通して、物語、キャラクター設定、カップリング、ラブシーンなどについて、自分自身は何が

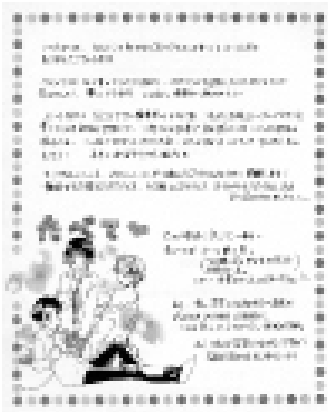


図5 町屋はどこ『またあした』リブレ出版（スーパーボーイコミックス）、2006年、201頁

好きなのかを発見し、それまで知らなかった自分自身について気づいたことを報告するという、このジャンル特有の要素である。BL作家たちはみな、プロ作家でありながらも同時にひとりの愛好家として、男性同士のロマンス・ファンタジーの枠組みのなかで、いかに多様な快楽を得ることができるのか、常に探求の旅路にいるかのようだ。そして、作家たちは、自分自身の気づきを自分だけの胸にしまっておくことはせず、あとがきに記すことで、愛好家仲間でもある読者と共有する。

町屋はこの1冊目の単行本である『またあした』のあとがきを見てみよう（図5）。

読者や編集者への感謝と、コミックスが出せたことについての感動の言葉に続けて、町屋はこう書いている。

「己の嗜好に気づく一冊…／気づけばオール誘い受。／（その誘い受の中でもみなさん自覚ない系。）／いや…自覚なかったんだよわたしにも…（汗マーク）」

このコメントの左横に配されているのは、デフォルメされた絵柄で、本編の「受」キャラクター3人がほほを紅潮させて、シャツを脱ぎながら「たべて（ハートマーク）」と、こちら（読者）を見つめる図である。どんなフィクションであっても、キャラクター、物語、設定などに書き手の「嗜好（好み）」が反映されるのは当然のことだが、BLにおいては、すでに存在する作者の「嗜好（好み）」が作品に反映されるだけではなく、創作のプロセスを通して、作者が自分の「嗜好（好み）」を発見するものだという認識が共有されているのだ。新人作家は「発見」とその「報告・共有」が立て続けにおこる傾向にあるのは当然として、キャリアの長い作家の場合でも、すでに自覚していた「嗜好（好み）」以外を思いがけずに発見し、あとがきで読者と共有することに変わりはない。例えば、1997年に単行本デビューしたマンガ家、依田沙江美は、2004年発行の「ブリリアント★Blue」のあとがきで、こう記している。

「……一冊かけてでこチューか……／しかもこれ／アホ受が苦手な人には地獄のよな作品だね……／でも我が事ながらこの作品以前にはアホ受好きの属性があるなんて自覚は無かったので／七海を描き始めてからはいろいろと発見の連続で楽しかったです」（依田 2004: 171, 172）

「アホ受」とは文字通り「アホ（バカ）な「受」キャラクターという意味だが、二十代前半と設定されている「七海」は単なる「アホ」な大人ではなく、幼い子供のような無垢で単純な思考回路をしていながら、常人離れした算数の能力を持つ優秀な電気工であり、アイドルのようなルックスの青年として造形されている。このような複雑な「アホ受」キャラクターを創造し、動かしているのは他ならぬ依田自身なのだが、その創作行為を通じて、それまで無意識の領域にあった「自分自身」について思いがけない発見をするのもまた、依田なのだ。そして、繰り返すが、その発見は、個人的な友達に報告されるだけではなく、単行本のあとがきで読者に報告され、共有される。したがって今、まさに本編を読み終え、あとがきを読んでいる読者には、町屋や依田が自分自身の「嗜好（好み）」を発見したその瞬間に立ち会ったような錯覚がおこる。さらに、読者自身が、「誘い受」や「アホ受」が好きな自分に気づいたばかりのタイミングだとしたら、作者へ強く共感を抱くことにもなる。このように、男性キャラクターたちが繰り広げる恋愛物語を受容することと、その物語の作者である女性達との交流をはかることがセットで展開するのがヤオイ・コミュニティなのだ。ヘビーユーザーになればなるほど、交流相手の範囲が広く、交流頻度が高くなる。

4 嗜好／指向

ヤオイ・コミュニティにおける「嗜好」という言葉の使われ方には独特のものがある。ヤオイ愛好家たちが「嗜好」と言うとき、ひとりひとりの愛好家は、特定のパターンを持続的に好むものであるという前提にたち、その意味での「好み」に「嗜好」をあてている。これは、持続的に一定の表現に自分の気持ちが向き、自分が好きなタイプの表現には常に快楽を与えられる、という表明であり、ここでの「嗜好」は「性的指向（セクシャル・オリエンテーション）」の「指向」に非常に近いニュアンスなのだ。たとえば同性愛者は、自分と同じ性別の人へ

の性的指向を認識し、さらに、どんなタイプの同性が好きなのか自己分析をするが、ヤオイ愛好家は、まず、男性同士ものの恋愛物語という枠組みへの指向を認識し、さらに、その枠組みのなかでの特定のタイプ、町屋の例でいけば「誘い受」への自らの指向を認識する。もちろん、ひとりの愛好家がひとつの設定のみを指向するわけではなく、「誘い受」を指向する人が同時により一般的な、自分からは誘わない「受」も好き、元気いっぱいの「やんちゃ受」も、「アホ受」も好き、というように複数の指向を持っていることは珍しくない。だが、複数ではあっても、ヤオイ愛好家であれば特定の指向を持っているはずだという意識が共有されていることはとても重要だ¹⁶。

好みの「嗜好」がオリエンテーションの「指向」と近いというヤオイ愛好家の考え方は、セクシュアリティをめぐる一般的な言説と面白いパラレルをなしている。ヤオイ愛好家たちはヤオイ愛好家でない人たちを「一般人」と呼び、「ふつつう」だと考え、それに対して自分たちを二つの理由から「アブノーマル」だと規定している。一つ目は、女性が性的主体として行動することをよしとしない社会にあって、ポルノグラフィの積極的な作り手であり読み手であるという意味での「異常」性。もう一つは、女性でありながら、男性同士が恋愛をする物語を必要とする「不自然な」嗜好を持つという意味での「アブノーマル」性。この2点のために、多くのヤオイ愛好家女性たちは実生活では異性愛者であっても、自らを一種の「性的少数者（セクシュアル・マイノリティ）」だと位置づけている¹⁷。そして、異性愛規範社会において、自分が異性愛者でないと気づいた主体が、では自分は何なのかを自己分析し、発見し、表明するのと同じように、ヤオイ愛好家は、ヤオイ愛好をしないことが規範である社会において自らがヤオイ愛好家であることに気づいた時点で、自らが「どんなヤオイ愛好家なのか」……ヤオイ愛好という「アブノーマル」な「嗜好／指向」の枠組みのなかで、より細かく自分の「嗜好／指向」を分析し、発見し、そして、仲間に表明する……つまり、「カムアウト」する。ヤオイ愛好家たちは、自らを「ア

16 ヤオイ愛好家のはっきりした好みを持っており、また、積極的に自分が何を好きかを探求する姿勢が同性愛者の多くと似ている、という視点は、柿沼瑛子からの言葉がヒントとなった。両者の類似点のより詳しい分析は稿を改める。

17 名藤多香子が紹介している「自分が腐女子であることを公表することは、セクシュアリティを公表することと、ちょっと似ている気がします」というやおい同人誌活動を行う愛好家の言葉も、この一例だ。なお、ここでの「セクシュアリティ」は「少数派のセクシュアル・オリエンテーション」の意味で使われている（名藤 2007: 74）。

ブノーマル」だと恥じると同時に「特別」だと誇りも抱いており、それゆえに「ふつつう」だが「凡庸」な「一般人」と差別化している。この意味でヤオイ愛好家はヤオイという性的指向——セクシュアル・オリエンテーション——を持つとも言える¹⁸。

5 「ヴァーチャル・レズビアン」

ヤオイという性的指向の者として、ヤオイ愛好家たちは性的ファンタジーを交換する。しかし、そもそも女性が性的主体であることがタブー視される社会に生きながら性的ファンタジーを交換することがなぜ可能なのか？ それは、愛好家女性の頭のなかでは、彼女がしていることは、あくまで好きな作品について感想を述べているだけであって、自らの性的欲望について語っているわけではないからだ。それどころか、愛好家同士は相手と同じ作品を読んでいるという前提で語り合えるため、ほとんどの場合は性的な語彙を用いる必要すらない。たとえば、やまねあやの「ファインダーの標的」について、「翌朝、『受』が元気いっぱい走っていきころのアップ！」「やんちゃ『受け』っていいよねー」といった対話はよくなされる¹⁹。この対話は直接的には「フィクサー」というエピソードの最終ページ、「受」キャラクターが走り去る姿の上半身を描いたコマについてのものだが（図6）、対話者の頭のなかには、確実に、前のページで展開される濃厚かつ直接的なセックスシーンも浮かんでおり、そのシーンを「共有体験」したという前提は暗黙の了解となっている。濃厚なセックスシーンを読んだ楽しみは、翌朝、「受け」が元気に走っていきさわやかで躍動感あふれる姿という、BLでは珍しい描写によって、より鮮烈なものとなる。「元気に走っていく姿、いいよねー」というコメントには、その一連の



図6 やまねあやの『ファインダーの標的』ピプロス（ビーボーイコミックス）、2002年、70頁（現在、リブレ出版より新装版で入手可）

18 金田淳子はやおいパロディの担い手たちが、自分の好むカップリングについて開示することが、自分の解釈コードの開示であると同時に「そのような性的志向をもつことの開示」だと述べている。ここでの「性的志向」は本稿での「性的嗜好／指向」と重なる概念だと思われる（金田 2007a: 174）。

19 この例は「溝口 2007: 59」でも述べた。

快樂がこめられているのだ。

MUDs (マルチ・ユーザー・ダンジョンズ) におけるネットセックスについて広範な調査を実施したシェリー・タークルは、十七歳の男子高校生の言葉を紹介している。

「ネットセックスはファンタジーなんだ。僕のMUD上での恋人は、RL (現実世界) では会ってはいくれない。雑誌『プレイボーイ』もファンタジーだったけど、MUDでは相手がいる。だから、MUDでやっていることは、マスターベーションだとは思っていない。もちろん、結局、自分の手で触っているじゃないか、と言われるかもしれないけれど。でもネットセックスでは、相手の女性が気に入ってくれるファンタジーを考えなくちゃいけない。だから、ファンタジーというのは、二人の人間の間のセックスの一部だと、今の僕は考えている。僕一人だけが部屋にいる、っていうことじゃなく。」 (Turkle 1997: 21)

参加者がセクシュアル・ファンタジーを交換するということ、その交換自体が他の人間とのセックスの一部であることにおいて、ヤオイ・コミュニティはMUDsに似ている。したがって、この男子高校生が「ヴァーチャル・ヘテロセクシュアル・セックス」をしている、と言えるのと同じ意味で、ヤオイ愛好家女性たちは「ヴァーチャル・レズビアン・セックス」をしている、と言える。ただし、MUDs上のネットセックスとは違って、ヤオイ・コミュニティは乱交的であり、また、「恋人達」はしばしば現実世界 (RL) でも顔を合わせる。MUDsの恋人達が現実世界ではお互いに会うことはなく、匿名性が保証されているからこそネットセックスで奔放に振る舞えたとすれば、ヤオイ愛好家たちは正反対だ。彼女たちは、お互いが現実世界において「自分と似たような女性」であり、「ヤオイ・セクシュアリティというマイノリティのアイデンティティを共有している」からこそ、安心して相手とのヴァーチャル・レズビアン・セックスを楽しむことができるのだ。

ヤオイ愛好家は異性愛者が^{マジョリティ}多数派だ。現実世界で異性愛を実践する女性たちを「レズビアン」と呼ぶことは、もちろん一般的には正しくはないし、本人達も自分がレズビアンだとは思っていない。だが、彼女たちのセクシュアル・ファ

ンタジーがヤオイの男性同士の表象で占められているとしたら、それでも彼女たちは100%ヘテロセクシュアル、と言えるだろうか？ ある30代の既婚の友人は、「今はそれほどでもないけれど、数年前まではダンナとのセックスも男女ものとして認識できなくて、頭の中でBLに置き換えてHしてたこともある」と語ったが、男になって男に挿入されている、というファンタジーのもとに彼女が夫と行った性行為を、100%異性愛だと定義づけられるだろうか？

セックスを身体的行為であるとのみ定義づけるならば、答はイエスだが、それは、セクシュアリティにファンタジーの次元を全く認めないことである。一般的には、身体に実際に起こっている行為をセックスとみなし、頭の中の妄想は性行為とはみなされない。しかし同時に、私たちは人間のセックスには頭脳 (妄想) も深くかかわっていることを知っている。であれば、現実世界での相手のいる性行為と同時進行の妄想も、マスターベーションと同時進行の妄想も、さらには行為をともなわない妄想のみのいずれであっても、妄想主体にとっては重要な営みのはずだ。したがって、妄想の交換・交歓はヴァーチャル・セックスであると言える²⁰。

もちろん、ヤオイ愛好家女性たちが脳内に浮かべている姿は男性キャラクターたちであり、彼女たちは表象の表面を見れば「ヴァーチャルなゲイ男性」として機能しているといえる。だが、ここで忘れてはならないことは、彼女たちは同時に、自分たちの脳内にある男性キャラクターの表象が、愛好家仲間の女性達の創作物であり代理人であることもしっかりと認識しているということだ。その代理人認識と共同体意識はあまりにも自然化されているため、わざわざ言葉にして表明する人は少ないが、彼女たちは心理的に愛好家仲間と一緒にいる。女性向けのセックス・トイの店を運営し、12年で3万個のバイブレーターやディルドを売ってきた北原みりのは、「バイブを使う女子の多くを」「体育会系」と呼び、彼女たちは「……妄想の必要性を感じていない。必要なのは、スイッチ」であり、「エロネタよりも、乾電池」だと述べ、ヤオイマンガや小説を含む「妄想でエロを楽しめる」女性たちを「文化系女子」と呼んで区別している (北原 2008: 56-57)。妄想のネタを創作、供給するのも、妄想を交換

20 この議論は「溝口 2007: 56-62」でも述べた。

するのも、すべてヤオイ愛好家仲間同士で行われるのがヤオイ・コミュニティである。したがって、北原の言葉に補足するならば、ヤオイ愛好家が必要としているのは、スイッチや電池ではなく、お互いだ。前述の十七歳の少年がネットセックスのパートナーの体に触れることがなくとも「ヴァーチャル・ヘテロセクシャル」だとするならば、ヤオイ愛好家女性たちは「ヴァーチャル・レズビアン」以外の何物でもない。そして言うまでもなく、「ヴァーチャル・レズビアン」であることと、現実に異性愛者であることは両立する²¹。

6 アクティヴィスト空間としての可能性へ

そしてこの「ヴァーチャル・レズビアン・セックス」という快樂によって連帯している女性たちのコミュニティであるヤオイ・コミュニティは、近年、レズビアン、フェミニスト、そしてクィアなアクティヴィズムを予感させる言説空間として機能し始めているのだ。詳しく考察することは別の機会に譲らなくてはならないが、駆け足でふたつのポイントについて述べる。

まず、近年のBLは、同性愛キャラクターがカミングアウトし、家族、友達、地域コミュニティといった周囲の人々との衝突や交渉を経て受け入れられていく過程を描く作品をコンスタントに生産するジャンルとなっている。もちろん、今でも、主人公が自らの同性愛指向（／嗜好）を「うしろぐらい性癖」とし、ドラマ性の演出に利用するタイプの物語も少なくない。だが一方では、現実的、あるいは、同性愛者の人権獲得の方向へ現実よりも何歩か進んだ形で、カミングアウトやその後が描かれる作品も増えているのだ。ゲイだからという理由で解雇などしようものなら、解雇した側が社会的制裁を受けるに間違いないという前提の世界観や（秋月 2006: 144）、地方都市で仕事相手の中高年の職人にゲイであることを揶揄されてもうまくユーモアでかわす主人公（依田 2005: 176-177）、あるいは養子縁組で養父となっていた亡き恋人の前の結婚での子供たちを養育し、地域の人々からも信頼されているカミングアウトしたゲイと

21 現実にレズビアンであることと「ヴァーチャル・レズビアン」であることも両立する。また、「ヴァーチャル・レズビアン」としての「愛」を称揚しながら、現実のレズビアンを同時に忌避することもありうる。後者の例としては、「えみくり 1989: 40」を見よ。

いったキャラクターに毎週のように出会う（たけうち 2003）。ある意味で昨今のBLは、その構成員の大多数が異性愛女性であるにもかかわらず、ゲイ・フレンドリーな社会や様々なゲイ市民のありかたを模索するワークショップを、ジャンルの一部で常開催しているとも言える。念のために言えば、これらの作品は主人公カップルが男同士であることが不問に付される世界観のそれではなく、現実の差別や偏見を認識した上で、それを克服し解消する具体的方策を考え、示していくものだ。まだ見ぬより良い未来のビジョンを表象することは、表象の次元ではあっても、それ自体がアクティヴィズムである。

もちろん、こういったゲイ・キャラクターたちは全面的に現実的なゲイとして描写された上で一歩先、数歩先の姿をも表象されている、というわけではない。例えば、自覚的ゲイ・キャラクターの増加にともなって、自分がふった昔の恋人が偶然取引先になり、今の会社の同僚にゲイだと暴露された、という奇妙な設定が出現している（暴露する本人も職場でカミングアウトすることになってしまうわけだが……）。セックスにおける「攻／受」の役割分担や、突然、男性と恋に落ちる異性愛男性キャラクターなど、ヤオイ特有の定型もある。こういった非現実的なヤオイの定型描写が、現実的なアクティヴィスト的想像力の結果といえる描写と、ジャンルの中で、また場合によっては同一作品内で混在しているのだ。しかし、そうではあっても、作家が、（意識的な自覚の度合いは様々だとしても）「ヤオイ・セクシュアリティ」というマイノリティの立場から、自分の代理人であるゲイ（同性愛）のキャラクターについて、「今の日本社会でゲイ（同性愛者）だったら」と真剣に想像をめぐらせて、彼らが生きやすいようにと描いた表象のアクティヴィズム的な力が減じるわけではない。もちろん、ヤオイの定型に慣れない読者は、定型ゆえに物語に入り込めず、アクティヴィスト的表象にまで至らないかもしれない。そのためここでは、BL作家榎田尤利が非BL作家、榎田ユウリとして発表した『妖琦庵夜話: その探偵、人にあらず』を作例としてあげる。一見すると人間に見える「妖人」の差別問題がきめ細かく、政治性をもって描かれる筆致は、ゲイ・アクティヴィズムを「妖人」アクティヴィズムに置き換えているという読みすら可能なほどだ（榎田ユウリ 2009）。



図7 寿たらこ『SEX PISTOLS』5、リブレ出版（スーパービーボーイコミックス）、2006年、14頁

また、最近のBLでは、「受」が性的主体である作品をはじめ、既存のジェンダー制度や人間のセクシュアリティにまつわる問題全般、つまり、結婚制度、生殖、異性愛、恋愛と結婚制度の関係、伝統的な家族観と生物学的つながりによらない家族などについて考察する、あるいは考察のきっかけを提供する作品が増えている。近年の作例からひとつだけ、寿たらこによるマンガ「SEX PISTOLS」をあげる²²。このSF的物語は、人間の30%が様々な動物から進化した「まだら類」で、残り70%が、実際の人類と同様に猿から進化した「猿人」という設定で、思いがけない展開をしていく。なかでも重要なのが、この世界では、「まだら類」の人間は生殖をするために複雑な仕掛けが必要であり、男女の性別を

問わず、医療テクノロジーの助けによって子供を産めることだ。作中で子供を持っているカップルは5組が男同士、1組が女同士、そして女1人と男2人の三角関係カップルとなっている。

「SEX PISTOLS」は愛、セックス、生殖、そして家族について、異性愛規範的な前提を転覆すると同時に強化する物語だ。たとえば、ぱりとしたスーツに身を包んだ英国貴族で著名な建築家である男性キャラクターが「母親」として自分の息子の世話をした日々を思い出すシーンは、「母親イコール女性」とする規範を覆し、新鮮だ（図7）。（逆に、ほっそりした美女が息子から「パパ」と呼ばれる場面もある）しかし同時に、「SEX PISTOLS」の世界では恋愛と生殖はイコールだと規定されており、その意味では、生殖を中心とする異性愛規範に同性カップルをも組み込んでしまう世界観だとも言える。異性愛規範の転覆と強化の両方をダイナミックに展開する「SEX PISTOLS」は、読者にとっては

楽しいお話であると同時に問題提議をする作品ともなっており、読者同士の対話を引き起こしている。

「ノリ夫がかわいい！ 国政、かっこよくて最高！」といったコメントと、「キャラがみんな個性的でいいよねー。でも、全部が結局結婚と子作りにつながるっていうのはイヤ」「えー？ だって自然じゃない？」といった対話が愛好家の間で気楽に交わされている。キャラクターの魅力を語る前者のコメントのような会話は、どんなジャンルのファン同士でも頻繁に交わすものだが、後者のような話題は、お互いの立場が違う女性たち——既婚か未婚か、異性愛か同性愛か、社会人としての立場が専業主婦なのか大学講師なのか学生なのか会社員なのかといったことが異なる女性たち——の間では避けられがちな話題だ。しかしヤオイ・コミュニティの中では、フランクな対話がなされている。その理由は、すでに見てきたように、一般的な差異よりも、ヤオイ・コミュニティに属し、ヤオイ・セクシュアリティという「嗜好／性的指向」を共有し、お互いに「ヴァーチャル・レズビアン・セックス」という快樂でつながっていることのほうが強力に作用しているからだ。この意味で、たとえ自覚的フェミニストは少数であっても、ヤオイ・コミュニティはフェミニストの実践の言説空間と呼べる。

マンガ家、よしながふみが少女マンガ誌で連載している「大奥」は、第13回手塚治虫文化賞大賞など数々の受賞歴や映画化など、BL出身の作家による作品としてこれまでで最高の評価を得ていると言っていだろう。流行病によって男性の人口が女性の1/4となったパラレル・ワールド「江戸」の男女逆転社会を舞台とするこの作品について、作者よしながと三浦しをんは対談の中で、この作品がクリアであり、少女マンガとBLを経てこそ可能となったものだと言っているが（よしなが 2007: 86）、二人の言葉に私なりに補足すれば、ここでの「BLを経て」とは、もちろん、大奥の美男子同士の性愛が描かれているから、ではない（BLを知らない学生のブックレポートではこのような意見は少なくないのだが）。そうではなく、上に述べたように性と生殖、ジェンダーの問題を、性描写も含めたエンタテインメントのなかで考察するという姿勢そのものが近年のBLが培ってきたものなのだ。少女マンガ作品である「大

22 2010年前半時点、『マガジン ビーボーイ』で連載中。

典」では性行為が直接的に描写されることはない。だがそれでも、登場人物たちが粘膜や体液をともなった性行為を行ない、快楽や苦痛を経験していることは身体性をもって表現されている。また、登場人物のなかでも「女将軍」たちの、従来の少女マンガの女性キャラクターの幅や密度を越えた造形や描写は特に強い印象を残す。よしながのBL作品では、男性キャラクターたちが性愛の主体として、あるいは客体として、翻弄され耽溺する姿や、男として社会化された自分と「受＝女役」である自分との間で葛藤する姿、天職に邁進する姿などが、妥協のない突き詰め方と、ユーモアと、時には体液の飛沫描写もともなって描かれている。こうした創作実践をBLで10年以上行ってきたことで得られた、いわば可動域の広い筋力のような表現力が「大典」に生かされていることは間違いがない。「大典」はBLではない。発表媒体から判断すれば少女マンガ作品であり、内容的にはフェミニストSFの文脈にも属し、広く男女の読者に向けられた作品である。だが、間違いなくBLの——よしながの場合は活潑な同人誌活動も行っていったことから、やおい同人誌も含めた広義のヤオイの——落とし子である。

7 無意識のクィア連続体のポテンシャル

フェミニストであることを公言しているよしながによる「大典」をあげたのは、それが明らかにフェミニスト&クィアなフォーラムとしてのヤオイの生産的成果であるからだが、だからといって、すべてのヤオイ愛好家が、自覚的フェミニストとして活動すべきだなどと言いたいわけではない²³。なぜならば、ヤオイ愛好家の多くは、読んだりおしゃべりしたり妄想したりを楽しんでいるだけで、アクティヴィズムなど意識していないからこそ、ヤオイ・コミュニティは、かつてないほどの幅広い女性達による、アクティヴィズムに発展しうる政治的フォーラムとして機能しているのであり、それこそが重要な可能性を示しているのだから。BL商業誌中心の時代になってからすでに20年近くが経過するというのに、本稿で示した程度の変化をしているだけのヤオイを筆者が過大評価している、と批判する人がいるかもしれない。しかし、ここではつきり

23 よしながは、三浦しをんと対談のなかで、自身が10代からフェミニストであることを述べた（よしなが2007: 70）。

言っておきたいのは、素早くすっきりと成果の出るフェミニズム運動などははなから不可能な夢だということだ。

マンガ家、わたなべあじあは、ニューヨークのセクシュアル・マイノリティのパレードであるプライドマーチに参加した体験をエッセイマンガとして発表している（図8）。本稿で述べたヤオイ・コミュニティのあり方をふまえれば、最後のコマの「ホモとかレズとかヘテロとかどうでもいい」という言葉が実質的に示しているのが、ゲイ、レズビアン、そしてヤオイ・セクシュアリティの連続体であり、「やさしいきもち」とは多数派である異性愛者としてマイノリティを容認する、という姿勢の表明ではなく、ヤオイ・セクシュアリティというマイノリティ指向の者として、わたなべら自身をいわばクィア連続体の一員として自己肯定する言葉であると解釈すべきだろう。そして、実社会でカミングアウトしたレズビアンである私自身もこの連続体に（レズビアンであると同時に）、ヤオイ・セクシュアリティの者として参加しており、「強く生きてゆこう」ね、と彼女たちと「愛」を交わせる。

さて、現在、その「愛」のコミュニティが先細る危険性が深刻になりつつある。先細る、ということは生産的なアクティヴィズムの可能性が潰えてしまうということだ。そうならないために、愛好家／研究者／教育者として、新古書店やスキャンレーションや検閲の問題などに取り組まねばならないと昨今、強く感じている²⁴。「リサイクルや節約は美德」と思っている学生に、新刊で購入しないと作家にも出版社にも一円も入らず、あなたの好きなBL作家も、BL商業出版業界全体も干上がっていくのだ、と説明するところから一歩一歩だ。こ



図8 わたなべあじあ「わたなべあじあが行く 本場NYゲイパレード」『BOYS ピアス』2008年11月号、109頁

24 スキャンレーションとは、マンガ作品を無断でスキャンし、翻訳をつけてウェブ上で公開する違法行為。英語圏については2009年10月30日～11月1日のヤオイ・コン（アメリカ、サンマテオ）でニコール・ノウリンをはじめ複数の参加者から、また、韓国については、2010年2月14日の吉原ゆかりによる研究報告「報告：韓国コミックス界における著作権問題について—ウオン・スヨン氏インタビューをもとに—」から近年の状況を知った（吉原の報告は、「SHE DRAWS 『女性が描く』『コミックスを描く女性たち』原画展 バレンタイン研究会／海外マンガ交流部会第2回例会」にて行われた。会場：京都国際マンガミュージアム）。

れらについてはBL以外のジャンルのマンガやコミックスの愛好家／研究者／教育者／出版人とグローバルに情報交換し連携できることも多いだろう。本稿がその発端ともなれば嬉しい。

参考文献

- * BLについては、レーベル名をカッコ内で示した。
- De Lauretis, Teresa (1994), *The Practice of Love: Lesbian Sexuality and Perverse Desire*, Bloomington: Indiana University Press.
- Mizoguchi Akiko (2003), Male-Male Romance by and for Women in Japan: A History of Yaoi Fictions, *the US-Japan Women's Journal* Number 24, pp. 49-75.
- Schodt, Frederik L. (1996), *Dreamland Japan: Writings on Modern Manga*, Berkeley: Stone Bridge Press.
- Turkle, Sherry (1997), *Life on the Screen: Identity in the Age of the Internet*, New York: Touchstone.
- 秋月こお『嵐の予感』角川書店（ルビー文庫）、2006年
- 東園子「妄想の共同体：「やおい」コミュニティにおける恋愛コードの機能」、東浩紀・北田暁大編『思想地図 vol. 5』NHK出版、2010年、249-274頁
- 榎田尤利『リムレスの空』光風社出版／成美堂出版（クリスタル文庫）、2002年
- 榎田ユウリ『妖綺庵夜話 その探偵、人にあらず』角川書店、2009年
- えみくり『月光オルゴール』発行：えみくり（同人誌）1989年、40頁
- 金田淳子「マンガ同人誌：解釈共同体のポリティクス」、佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣、2007年a、163-190頁
- 金田淳子「やおい論、明日のためにその2。」『ユリイカ BLスタディーズ』第39巻第16号、2007年b、48-54頁
- 北原みのり「パイプに見る現代女子エロ事情」『野生時代』2008年6月号、56-57頁
- 栗原知代「概論2 同人誌をめぐる考察」柿沼瑛子・栗原知代編『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』白夜書房、1993年、336-338頁
- 木原音瀬『WELL』蒼竜社（ホリーノベルズ）、2007年
- 崎谷はるひ『心臓がふかく爆ぜている』幻冬舎（ルチル文庫）、2010年
- 雑草社編集部編『BL小説（ボーイズラブノベル）パーフェクト・ガイド（活字倶楽部別冊）』雑草社、2003年
- たけうちりうと『推定恋愛』太洋図書（SHYノベルズ）、2003年
- 名藤多香子「『二次創作』活動とそのネットワークについて」『それぞれのファン研究』風塵社、2007年、55-117頁
- NEXT編集部編『このBLがやばい！ 2009年腐女子版』宙出版、2008年
- NEXT編集部編『このBLがやばい！ 2010年腐女子版』宙出版、2009年
- 三浦しをん『シュミじゃないんだ』新書館、2006年
- 三浦しをん「アートライフ・インタビュー」『スパイラルペーパー』No. 115、スパイラル／ワコー ルアートセンター、2007年、2-3頁
- 溝口彰子「ホモフォビクなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン：最近の

- やおいテキストを分析する」『クィアジャパン VOL. 2 変態するサラリーマン』勁草書房、2000年、193-211頁
- 溝口彰子「それは、誰の、どんな、『リアル』？ ヤオイの言説空間を整理するころみ」『イメージ&ジェンダー』4号、彩樹社、2003年12月、27-53頁
- 溝口彰子「妄想力のポテンシャル：レズビアン・フェミニスト・ジャンルとしてのヤオイ」『ユリイカ 腐女子マンガ大系』Vol. 39-7、青土社、2007年、56-62頁
- 山本文子& BL サポーターズ『やっぱりボーイズラブが好き：完全BLコミックガイド』太田出版、2005年
- よしながふみ『あのひととここだけのおしゃべり』太田出版、2007年
- 依田沙江美『プリリアント★Blue』1・2、新書館（ディアプラスコミックス）、2004・2005年

